



♪CONTENTS♪

- 森の人インタビュー (渋谷菜津子さん)
- 今年度もライフ・アンド・フォレストを開催
- 京都京北木こり技能大会を見学
- 森林・林業小話 28
- 長岡京市環境フェアに参加
- 編集後記
- 久保常次さんを偲んで

No.40 (2017.12.14 発行)

森の人インタビュー

第16回

11月14日(火)小雨の降る中、園部町森林組合で働く渋谷菜津子さんにお話を伺いました。渋谷さんは2010年からこちらで林業に携わる仕事をなさっています。

育ったのは神戸の街中、一山は好きだったそうですが一林業との関わりのほとんどない生活を送る中、高校2年の夏、長野に家族で旅行した際に、山で測量している人を見たことで、漠然と山にかかわる仕事がしたいと思うようになったそうです。大学では林業のことを学んだもののすぐにはこの業界には入らず、3年間介護や工場といったほかの職種に就かれました。その後いくつかの林業関係の職を探している中、今の仕事に就くことになったそうです。

今では重機の免許も取られそうです。実際に現場で軽く見せていただきましたが、見事にグラブプルを操っていました。現場を見せさせていただいた小倉銘木店の藤原さんに渋谷さんのことを伺うと「どうしたって体力面ではやはり男性にはかなり劣るが、やる気があるし、飲み込みも早い。一緒にやっていると気持ちがいい」とおっしゃっていました。本職の方に褒められるほどに渋谷さんは真摯にやっておられるのがわかります。

渋谷さんは園部で暮らしており、その田舎暮らしも肌にあうとおっしゃっていました。実際地域の方々と交流なども積極的に行っているそうです。

お話を聞くうちに、そこでの生活も含め本当の天職に巡り合ったのだなとしみじみ思いました。

僕は来年大学4回生になることもあり、最近強く将来、あるいは働くことについて考えます。様々な不安もありましたが、今回の渋谷さんのお話で一つの指針を得られたような気がします。迷ったときはまずは原点に戻ろうというものです。

渋谷さんも実際ここに至るまで様々な苦労はあつ

ただらうと思いますが、その都度しっかりと地面を踏みしめ、明日を描き進んできたのだらうと感じました。インタビューを通して、「素直さ」が渋谷さんの「強さ」なのだなと感じました。

最後に将来的な希望を聞いたところ、大型トラックの免許も取ったので、自分で大きな木を切って、出して、市場まで運びたいそうです。近い将来それが現実のこととなっている画が僕にはたやすく想像できました。

今回は、渋谷さんをはじめ多くの方々の協力のもと楽しくインタビューすることができました。至らぬ点はたくさんあったでしょうが、根気よく接していただき本当にありがとうございました。(瀬戸山)



アドバイスを受けながらプロセッサを操作中の渋谷さん。



グラブプルを操作中の渋谷さん



参加者が伐倒競技の真っ最中

京都京北木こり技能大会を見学しました

「木こりの、木こりによる、木こりのための、大会」というシンプルで、力強いサブタイトルが付いたこの大会は、京都市右京区京北で開催されている林業のプロフェッショナルが技術を競う会です。昔から林業の町として栄えた京北では、国産材があまり使われなくなってしまった現代でも、人々の連携と様々なアイデアを持ち寄り、実は京都市の暮らしを根っこから支えている森林を守り続けています。

毎回、びっくりするのが、この大会のイメージポスター。昔ながらの法被を羽織った(羽織っていない!?)現役の木こりたちが勇ましく「日本の山は俺らが守る」と一方向を見つめています。

そんなイメージの刷り込みもあり、ちょっとドキドキしながらの当日は、まさかの台風直撃でした。雨の中、ポスター通りの勇ましい運営スタッフと、希望にワクワクしながら大会に挑む若手が、交差する雰囲気です。

大会は、実際に森の木を切る伐木・造材部門競技とグラッブル競技とに大きく分かれていました。何となく山の作業を知っているような気になっていたのですが、一つ一つ審査と解説が入ると、木を一本切り出すにも、安全確認と効率よく出すために倒す方向があることなどを再認識するいい機会になりました。

また、競技とは別に、地元の方々による飲食ブースにも森の恵を使ったものが多く準備されていました。クロモジのドーナツやリボンが印刷された杉のコーヒースタンド、猫や熊のチェーンソーアートコーナー、重機の実演・試乗会など、家族みんなで楽しめる心遣いも感じました。

木こりの皆さんは「この大会を京都に留まらず、全

国の方に出場していただき、全国大会にしたい。そして、日本の林業発展に貢献したいという想いで実行しています」と語ります。森林とともにある人間の暮らしとは何なのか、実際に行動されている京北の方の息遣いに、自分には何ができるのかを改めて考えさせられた一日でした。(森)

長岡京市環境フェアに参加しました

11月18日(土)に長岡京市環境フェアに参加してきました。多数の環境系団体が出展する当フェアは、今回で9回目の開催です。午後からは天気も回復し、多くの親子連れが来場していました。

百年の会は、拍子木と積み木遊びコーナーを出展しました。様々な樹種でできた拍子木の重さを比べたり、積み木を積み上げたりと、思い思いに楽しんでいただきました。積み木で遊ばれている様子を観察すると、積み木同士をたたいて音を立てたり、高く積み上げたりと、年齢によって遊び方が異なるのがおもしろかったです。積み木は、工夫次第で遊び方が無限に広がる玩具だと思いました。幅広い年代に愛されるからこそ、木の良さを効果的に発信できるのではないのでしょうか。木の香りがいいねと来場者の方がおっしゃっていたのが印象的でした。

また、木の実工作や薪割りなど他のコーナーも回ってきました。どの団体もしっかりと準備されていて、大学生でも十分に楽しめる内容でした。省エネ相談のブースにて「シャワーを毎日40分浴びています」と言ったところ、「節水と健康のためにお風呂を入れなさい」と諭されたので、その日に早速湯船を張ることに。身も心もキンキンに冷え切った私を、お湯は無言で包み込んでくれました。身に余るほどの温もりに、涙が出そうでした。エコな暮らしを意識しながら京都の冬を乗り切ろうと思います。(丸山)



親子で積み木遊びを楽しむ

久保常次さんを偲んで

久保常次さんとは僕が初めて参加した「山仕事サークル杉良太郎」の作業でお会いしました。常次さんはごつい山男ではなく、スマートでカッコイイという印象でした。それでいて豪快にチェーンソーで丸太を切っていました。サークルの夏合宿でのBBQでは気さくに話しかけてくださり、サークル主催のお祭りでの杉玉づくりでもお世話になりました。常次さんが僕にとっての山主さんのイメージになり、映画や小説の世界でしかなかった林業を肌で感じさせてくれたような気がします。ありがとうございました。(衣笠)

杉良太郎の創設以来、常次さんにはたいへんお世話になったと聞いています。私が最初に常次さんにお会いしたのは、去年の薪割りの時でしょうか。寝坊した上に薪割りも下手くそ、救いようのない私を、そばで見守ってくださいました。最後に「上手くなったね。」と言ってくださり、とてもうれしかったのを覚えています。常次さんともっとお話したかった。杉良太郎 20 周年記念パーティーに来てほしかった。悲しい気持ちでいっぱいです。どうか心安らかに眠りください。(丸山)

久保常次さんに始めてお会いしたのは 2 年前の 7 月でした。まだ大学 1 回生で山のことを何も知らない私に、常次さんは下刈り作業を熱心にご指導していただき、鎌の使い方や山のことを学ぶことができました。それから、常次さんとは何度もお会いする機会があり、常次さんの温かな人柄に触れることができました。たくさんの人から慕われていた山主さんでした。

常次さんの訃報に接した時は本当に哀しかったです。安らかな眠りをお祈りしています。(青山)

久保さんと初めてお会いしたとき、自分の祖父に似ているなど感じました。その聞く力と行動力は他にはないものでした。道具の正しい使い方を教えていただいたり、壊れたヨキの補修もやっていただいたりしました。僕が卒業したら善右衛門にメンバーで泊まって昔ばなしがしたかったです。あの手と目をもう見るできないのはとても残念です。心からご冥福をお祈りいたします。(瀬戸山)

いつ初めて久保さんとお会いしたか忘れるほど、私の

なかでは早い時期から自然に

親しく声をかけてくださった印象が残っています。「森と住まい」という会の名前を体現するのであれば、本来はもっと山のほうに関わる機会を増やす必要があります。そんなことをボンヤリと考えているうちに訃報に接することとなり、残念な気持ちでいつぱ

いです。とにかく、いろいろお世

話になり、本当にありがとうございました。(野瀬)

久保清美さんのパートナーである久保常治さんは私にとって最も信頼できる林業家の 1 人でした。常さんは北区雲ヶ畑で黙々と木を植え、下刈りし、間伐を行ってきました。山仕事サークル杉良太郎に参加する学生や市民に森林作業の楽しさ、昼食時に鯖を焼いて提供するなど山作業の楽しさを身をもって教えて下さいました。地域の方も巻き込んで雲ヶ畑の山のシキビを採取して換金するアイデアをお持ちでした。経済万能の中で放置された中山間地域を再建するためにも、常さんの残してきた足跡や功績をこれからも伝えていくことが残された私たちの責務だと思います。常さんが亡くなったことは、私たちに何ができるのかを鋭く突きつけています。(白石)



集合写真の真ん中に座る常次さん

今年度もライフ・アンド・フォレスト（2018年1月7日）を開催します。

7回目をむかえることになったライフ・アンド・フォレストは、来春1月7日にキャンパスプラザ京都で開催します。

今回は3つの機関で教育活動をしている先生達をお招きし、どのような教育が行われているのか、卒業生のキャリアにはどのような職業があるのか、また課題や展望などについて本音で議論します。人材育成の観点から今後の日本の林業について語り合ひましょう。

◎日時：2018年1月7日（日）

◎場所：キャンパスプラザ京都 第3講義室

住所：京都市下京区西洞院通塩小路下ル

◎パネリスト

杉本和也さん（岐阜県立森林文化アカデミー）

佐藤宣子さん（九州大学農学研究院）

小山 敢さん（鳥取県林政企画課）

◎コーディネーター

高部圭司さん（京都大学大学院農学研究科）

田村典江さん（総合地球環境学研究所）

❖連載❖（森林・林業小話 28）

意外に古い木質ペレットの歴史

前回、バイオマスブームが2000年後から始まったと書きましたが、実際には2回目といえます。1回目は1979年の第二次オイルショック直後の1980年頃から始まり、原油価格が次第に下落してきた1985年頃までです。木質ペレットは、その前の1970年頃にはすでに技術の存在が報告書で紹介されており、原理的には生産可能な状況にあったのだらうと推測しています。ネットの情報によると、国内では岩手の葛巻林業（自己破産後の2017年時点では株式会社エジソンパワーが事業

引き継ぎ）が1982年に広葉樹バークを原料に生産したのが最初だそうです。1984年には生産量が2万8,000トンになったという記録があるくらいで、一気に増えたことが伺えます。その後、1991年から2001年は3工場だけだったらしく、ブームが去ってからの落ち込みは当時の木質燃料の位置づけが記憶に頭の片隅に残っていることもあって、寂れ具合が今も印象的です。こういった歴史的な経緯を踏まえて、今後の方向性を探ってほしいところです。〈野瀬〉

京都・森と住まい百年の会 会員募集

当会は、分断された京都の森林とまちの暮らしを結んで、互いの関係がよりよいものになることを活動目的としています。お近くの方にもぜひ、NPO 法人京都・森と住まい百年の会をご紹介ください。

ご賛同いただける方には入会のお誘いをお願いいたします。当会の詳細、入会については事務局までお問合せください。

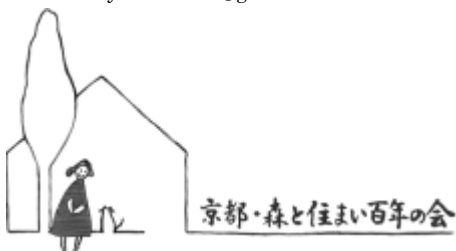
ホームページ<<http://www.kyoto100.com/>>

ブログ<<http://kyotos100.blog102.fc2.com/>>

〒604-0931 京都市中京区寺町二条下ル榎木町 98-7

FAX : 050-3309-6365

E-mail: kyoto100nen@gmail.com



編集後記

今号は当会会員で、10月28日にお亡くなりになられた久保常次さんの追悼紙面を掲載しました。



本紙は、平和堂財団環境保全活動助成事業「夏原 Grant」の助成を受けて発行します。